

ハーマン・メルヴィル作
『雑草と野草——一本か二本のバラと共に』
「一本か二本のバラ」

藤江 啓子 訳

第1部——落ちた時 (As They Fell)

(1890年、2月13日付けの原稿)

待ち伏せ (The Ambuscade)

胸の麻布の柔和な交差が
ヴェールのように引かれた夢想を避けた。
あなたによく似合う。あなたの処女の修道院に
入り込んではいけない。
だが、白い尼、あの白く落ち着いた
純潔の上品な衣服、
5月の雪。つかの間の期間、
愛のまどろむ芽生えの守衛——
いや、ついに時が
今は霜に養われるアモルの燃えるバラを
露わにするまで、愛を育む。

地下で (Under the Ground)

庭と使われていない古い墓の間で、
小道がクローバーを通り抜ける。
そこで私は露にぬれた花輪を抱えている
庭師の少年に会った。

私は驚いた、なぜなら私は納骨堂をちょうど
通りすぎ、その暗闇を避けたところだから、

「生まれ、どこへ行くのか？こんなに持って？
バラだ！ あなたはこれらを埋葬してはいけないではないか？」
「はい、婚礼の時のために
私の主人は花を保存しておきたいのです。
じめじめした納骨堂には魅力があります、
そう、私たちはバラを墓に埋葬します。」

愛情を込めて (Amoroso)

ロザモンド、私のロザモンド
バラのなかのバラ、
彼女の花は夏のもの
冬に輝くのは言うまでもない。
心地よい柔毛のような苔で覆われて、
氷が張り詰めた流れに魅了され、
私たちが雪の上を急ぐ時、
赤いアルクトゥルス、いつも赤い
牛飼座は、私のそばのもっと
赤い星を見る。

おお、ロザモンド、バラのロザモンドは、
向こうのダイアナの支配か？
ほら、ツララが下がり、
冷気が彼女の神殿から垂れ下がる！
だが、ロザモンド、バラのロザモンドは、
私たち婚約者に、
露が炎で絆を作る——
一つの純潔を彼らは分かち合う。
あなたの頬が氷のようだと感じ
柔毛が心地よく囲い込む——
これが結婚の愛の工夫、
これが極地の楽園
そして雪の中での求愛！
ロザモンド、私のロザモンド、
バラのロザモンド、苔バラよ！

新バラ十字団 (The New Rosicrucians)

私たち、騎士団の信徒は、
十字架にバラのつたを絡ませ、
バラの杯の酒を飲み干し、
損得は気にかけない。
説教師がどんなにうるさく言おうとも
原罪なんてないのだ
いや、そんなものは私たちにはないのだ。ただ悪意があるのみ。

そんなものからは除外され、祝福のなかに横たわる
私たちは人生の大波をのたうちまわせよう、
もし、悲しみが訪れたら、もう一度からませよう
十字架のまわりにバラのつたを。

バラ油の瓶 (The Vial of Attar)

いにしえの異教の昔、
レスビアが死に恋人が後に残された時、
再開の喜ばしい知らせが届く前に、
彼は火葬場から絶望して
戻った——
ああ、壺のなかの冷たい灰に流す
涙で瓶は熱い！

しかし、バラの恋人である私は、
私の恋人が、雪の墓の方へ行くとき、
アスターが後を追い、
瓶になぐさめられる。
花からは別れても、
一日でしおれる花から
別れても、
香りを失うことはないの
私は墓にそれほど悲しみを感ずることはない。
バラよ！私はあなたの運命と戯れる。
なぐさめはとどまりはしない。

花に及ぶものは何もない、
そして刺激的なバラ油が
滅び去った花を私に
思い出させる。

炉辺のバラ (Hearth-Roses)

砂糖カエデの苗床での燃え残りが
ここ火の庭に守られ、
バラが麝香を生み出すように
バラが赤いように、
バラが消えるように
消えるときには嘆いた。
だが花にまさり、燃えている時と同じように、
灰は香りが良い。

ああ、愛よ、人生が閉じる時、
正義の死に方をし、
私たちは炉辺のバラと競い、
私たちの灰は良い匂いがするように

バラ窓 (Rose Window)

説教師は雅歌から
神秘に満ちた4つの言葉をテキストにとった――
シャロンのバラ、イエス・キリストを
復活と生の姿で思い描く。
そして、多くの壺を指しながら、
いかに甘く芳しい説教を彼はしたことか。

そこで、眠気をもよおす午後、
灰色の教会堂、子守唄に揺られ
眠気をさそう眩惑で満たされた
なみなみと注がれた蜂蜜酒。私は私の端正な手を組み
ついに眠りが恵みの夢とともに私を捉える。

私はバラを持った天使が
朝の庭の門から出て来るのを見た。
そしてランプのようにバラを高く掲げ
彼は墓の狭い道に入って来た。
私は後に続いた。そして私はバラが死者の
上に撒かれるのを見た。経帷子や死者の衣は
すべて明るく灯され
赤い格子縞やタータンチェックとなる。

私は目覚めた、高い大きなバラ窓、
切妻に取り付けられた縦仕切の輪、
豊かで柔らかな色合いに染められ、
そこでイーリスとオーロラは出会った。
窓枠の葉形飾りの丸彫りから
光の束となって斜めに
黒ずんだ汚れの上に変貌させる光を
投げかける、埃っぽい教会の椅子では
埃が踊る。

ロザリオ (Rosary Beads)

I

受け入れられた時間 (The Accepted Time)

バラを崇めよ、
バラの礼拝堂が崩れるまで、
バラの香炉が揺れなくなるまで
ぐずぐずするな。
「今日だ！」バラ牧師は叫ぶ。

II

値踏みできないほど高価な (Without Price)

バラを持て。花を買うのに
金は不必要。あなたの技を試すために
あなたのバラ花壇も不必要。
だがバラの光にこたえよ、

肉は赤いバラとなり、
パンは白いバラとなる。

Ⅲ

一粒一粒 (Grain by Grain)

一粒一粒砂漠が庭園の地に
吹きだまる。
バラのまわりにしっかりと柵をめぐらせよ、
絶えず広がりつづける砂が忍び入るのに
気をつけよ。

花々の女主人への献身 (The Devotion of the Flowers to Their Lady)

11世紀の高貴な生まれのプロヴァンス人、修道士のクレマン・ドルオン作とされる。彼は若い頃は吟遊詩人で、愛とバラの信奉者であったが、結局は、その年齢の彼のような他の人と同様に、長年寵愛を受けた陽気な集りからは秘密の理由で退き、究極的には世界からは消え修道院へ入った。

ああ、女王よ、私たちは忠実だ。悲しむ者たちに忘れさせようか？
私たちはエデンの園生まれだ——
そこでの記憶をあなたと共有し、
そしてそれでもあなたの侍女だ。

あなたは批難するようにつぶやくために
思いにふける人間を慰めるふりをする。
「とっても陽気な花だ、
私たちはしばらく疲れているだけかしら？

なんだって、何も起こらなかっただって？ 蒼白になり、
いまましいものを生み出すようなものは何も起こらないだって——
老齡、衰弱、そして悲しみは
人間をむさぼり食うだって？」

彼らはなぜあなたはそんなに輝かしいのかと感嘆する。
どこからその輝き、喜びがくるのかと——

イトスギが見える所での
喜びのはなやかな歓楽！

アダムの墮落は水辺の地滑りのように
広がる衝動をゆすり、混乱に落とし入れるからといって
あなたはアダムをほとんど批難しない。

憤った天使は裏切られた世代に
先駆ける目で
イヴが男との婚礼を飾る花を
投げ捨てるがあなたは批難しない。

ああ、追放は追放、もっとも土はスパイスがきいているけれど、
シュシャンで私たちは思い焦がれる——
神の庭へのひそかな欲望に
思い焦がれる。

だが私たちは皆、
私たちは百合、その青白さは情熱、
私たちはパンジー、先駆者の様子でいかに私たちが生き生きとなれるか
熟慮し忘れない。灰色で銀色のふちどりのある肩衣をまとい
薄明かりと露のなかで、おとなしくやってくる時、
夜明けが、青白い司祭の手とともに、そして宝石に覆われ、
あなたに触れ、冠をいだかせる。
息をする。ああ、遠い家系の娘よ、
追放されたが、追放において祝福され
それに対して、期間が指定される。
花よ、樂園の保証、目に見える誓約、
バラ、害虫にもかかわらず、それを証明する。

第2部——バラ農夫 (The Rose Farmer)

バラ農夫 (The Rose Farmer)

ライ麦畑を通してやって来ると
田舎の詩人は口笛を吹く。
だが棘のあるアザミを
苦勞して通っても誰がフルートを吹くだろうか。
バラの道にも同様に
棘だらけの道が現われるかもしれない。

だが運命の祝福された棘やイバラを通して
ずたずたに苦勞して通った私たちは
遅れてバラのところにやって来る——
地所を正しく管理すること、
このことは私たちの仕事として
課せられるのもっともだ。
高貴な衣服の仮面を取る茂み以外には、
私たちはなにごとにも不慣れだが。

貧困は簡素な地所、
富は複雑を含意する。
どんなに気難しく、悩ませる欲望が驚かせ、
どんな困惑させる野心が立ち現れることか！
そうすると、また、運命は
1セントごとの高利貸しで高価な土地を貸した！
富の神マモンは、モーゼのようには柔和ではなく、
痛風病みで、苔バラの上にマットレスを敷くが、
もみくちゃになったバラの葉が彼を怒らせる。
キリスト教の励ましの甘い満足の提供者として、
認めよ。
「卑しい金」と私たちは買いかぶる。
しかしながら、ダマスカス近くのバラ農場を
金持ちダイヴスはアラスカの貧者ラザラスの
雪の農場と同じ率で交換するだろうか？

それで私は思い出す、私は戻ろう——
ある友人、その人の影は小さくなってしまったが、
その人のために彼らはターバンを巻いた墓を建てた。
東方の肥満した高官。
その人の私への優しい善意は
私が彼のラマダンに反して
食事にチャウダーを用意した時に始まった。
死ぬ時に彼は私を覚えていた。
素晴らしい遺産、彼が保有する農場をくれた。
その農場はバラに捧げられ、
パルパルと双生のアバナの
2つの聖なる川が流れ、
最近公園を取り囲み
疑いもなく、その庭を愛撫するために、
少なくとも半ばで曲がる。

だがそのバラ農場は管理を必要とする！
1時間ごとにその花、至福は
私が怠慢だと批難する。
というのも私はまだぼんやりと考え——ぐずぐずする——
長い間躊躇し、言う、
「5千本のダマスクローズ——
(私のバラ農場には多くない)
花束の山を作ろうか？
それともバラ油の 水晶のような滴りを作ろうか？
臭うためか売るためか、あるいは利益の為か。
バラを切るのは早くて容易だ、
だがバラ油はすぐには得られない、
さわやかなしぐさ以上のものを要求する。
だがこのバラ油は、私が思うに、
長く持ち、バラの正当な笏や
雑草の戴冠よりも生き延びる。

最近、ぶらぶらと歩きながら、この討論にのめり込み、

最も容易なものを選ぶことに
幾分傾いていると、
私はペルシャ人にたまたま最近出会った。
彼は紳士のバラ農夫で
彼の庭の門のそばでひざまずき、
巡礼のように、数珠を数えている。
数珠だって？ コインだ。黄金のものが一つ一つ
銀色の針金に通してある。
彼はコインを数えるごとに
眉を上げ、目をまるくして
信心深く、感謝の祈りを祈る。

もちろん、私が思うに、この信心深い人は
花屋でもあるが、私の疑問を解いてくれるだろう。
彼に挨拶をして、私はすぐに始めた。
「はっきりしない問題を解決してくれ、お願いします——」
そしてバラとバラ油を置いた。

そうすると近くも遠くもバラだった、
なぜならば、彼の庭は、煙たい町からは
離れた草原のデイジー同様繁茂する
バラの芝地であった——
男たちに噂されるのを聞く時に婦人が振り向くように、
バラは振り向いた。
だが、彼は皺の寄った顔をそらせた、
年配だが、赤い顔色だ——
夕陽に当たるバラと彼自身の色から
投げかけられる暖かい紅潮で二重に
赤く染まっている。
そして、私をじっと見て言った、
「そしてあなたは？ —— 私よりも年上か？
あなたは思慮深い提起を携えて遅れてやってくる、
ああ、あなたの時はずっと前に過ぎ去った」——
「本当に、だが運命の定めで

私はバラのところへ遅れてやってきた。
それでどうした？ 白髪は変装にすぎない、
なぜならば、心の中では若さは決して死なないから——
長く遅れて鋭敏になり、
私はバラを真剣に求める。
だが、まずこの大事な問題を解決しよう——
バラとバラ油についての。
私は間違いを恐れる、私を正してくれ。

彼は老いているが、皺の寄らないベテランの若者のことを聞いて
彼のすぼめた両目が有り難そうにまばたきしたように思えた。
だが今や交代する槍騎兵のように
すぐに答えが返ってきた。
「バラ油だって？ 向こうのパールシー教徒に行って尋ねなさい。
蒸留で熊手のように痩せている、
彼の負債は取り消せ、1シリングの価値もない！
どうやって彼が生存しているのかとよく不思議に思う。
隣人は誰も彼を愛していない、甘い努力は決して
彼から花束を得ることはないだろう。
あなたのダカット硬貨でさえも。
彼の蒸留器のための節約装置だ！
私のことは皆よく言う。
私が数える小さなコインが見えるだろう。
私は安く売るが、もっとたくさん売る。
苔生した壺に入れて、あるいは花束にして、
私のバラにはいつも市場がある。
だが、バラ油はとても高価なので、
人気がないのは明らかだ。
私は繁栄する、向こうの天は私を祝福する。
私の愛しい人たちは 群がって私を愛撫する。」
その好意的な判決を耳にすると、
彼のバラ宮殿が動いたと思った。
だがさらに彼は言った。「向こうのパールシー教徒は
花の首切り役人と青ひげを卑しめる。

汚れない処女で開花し
蓄みが胸を露わにする時、
化石化された精髓を得るために
彼は生きたバラを三日月刀で切る！
私は認めるが、私の異なるやり方に対して、
なにか、見かけだけだと人は言うかもしれない。
曙の露のなかでバラを引き抜け、
小さな蓄みとその光景を満足させるために——
夜明けの開花、花の開花
なんとという飛行のレースか！
すぐに香りが失せる。
それでもつかのまの喜びを持つことができ、
そして翌朝の蓄みを手に入れることができる、
その連続だ。」そう話し終えた。
ほら、赤くなった花壇では
なんとという騒動だ！バラはみな
情熱的な頭をもたげている！
だがここで怒るものは何か、——
激しい憤りがなぜ示されるのか、
お願いだから彼女に誰がほのめかすのか尋ねてくれ——
モルモンの最初の妻が呻き声を上げている。
だがバラ農夫は、彼が栽培したバラに
長いあいだ夢中で、
視線をバラに向け、
話を続け、より詳細に語った。
そして今や少し暖かくなって、
「この消失が魅力だ！
そしてそれは天上の精霊を勝ち得る。
このつかの間に見える魅力が
下界の神の息子たちを誘惑した。
輝く第7天の永続に疲れ果て、
イヴの美しい娘たちではない、否、
彼女たちは魅力においては
バラほどにはうつろいやすいものではない。」

バラだ」

彼はこう言った、批難しながらも

媚びへつらって——

頭上の天使の恋人たち、

セラピムでさえもバラを敬愛する——

バラは気まぐれを好み、

重々しくうなずいた、——彼の正しさを証明しながら。

「だが、今や、あなたの緊急の問題には、

あらゆるやり方——賢明な用途、

評判と利益、健康、楽しみのためには、

私はバラがよい——バラ油は忘れよ！」

そしてこう言ってその率直な男は

再び数珠を数え始めた。

庭のバラは、管理人がそれほど強く

心を表現したのを聞いて、それほど深く顔を

赤らめたことはなかった。

バラは笑っているようでもあった——

優しい気質で、何事も許すだろう、真のレディーは、

粗野であっても、心からこれに関して保証した。

慎重に再考し、

私は裕福なペルシャ人のもとを

離れた。彼は人生において本当に間違いのない

賢明な慎重さゆえに報われているように思えた。

至福の精髓を望み、

超絶的な本質を貯蔵することもない。

骨の折れる苦しみで

バラを水晶のように結晶させることもしない。

だがここで機織機を捉えよ。

もっともダマスクは貴重な素材ではあるが、

あまりにも細く上品に織るな、

主題の花で十分だ。

結び (L'envoi)

シリアの朝のバラ色の夜明け、
ノアの歳で若い、
なぜ60才で老いるのか？
害虫はあなたのティリアン紫の外套を蝕むのか？
太陽の光線が降り注ぐところで振り落とせ！
友よ、時は私たちを仮面で覆うだけ——
灰色のウィッグをつけた少年は核心は若い。
ほら、どんなダマスカスのおとめが、
バラよ、パルパルの岸へ誘うことよ！
溜息をつくなかれ——老令、鈍い鎮静剤、
そして以前の不毛の年月、
花は私たちには不似合いだ。 いや、賢くなれ、
好みにおいて賢くなれ、たとえ平静でも
灰色の髭をした老人はバラのもとに遅れてやってくる。

テキストは次のものを使用。

Melville, Herman. *Weeds and Wildings Chiefly: With a Rose or Two*, by Herman Melville: *Reading Text and Genetic Text*. Ed, with introduction by Robert Ryan. Evanston: Northwestern UP, 1967.